

編集後記

今年は少し様子が違う師走を迎えている。いつもなら社会や経済の活動が盛んになるはずのこの時期に、商店街や観光地、夜の繁華街もイベントや人出は少なく、今ひとつ盛り上がらない。今回の新興感染症第二波が収まりかけ、春から続いた社会全体の心理的、経済的な我慢がそろそろきつくなってきたころに、行動・活動の制限を緩和し、社会の消費・経済活動を促す施策が講じられた。収束に向けた期待感とともに少し明るいムードになったところで第三波が始まった。今回の波は高く未だに増加基調でピークにすら至っていない状況である。経済を回すことと対感染症の公衆衛生を両立させることの難しさを改めて認識させられた。医療崩壊に至らぬ程度にゆっくりと集団免疫が進み、同時に、有効なウイルスワクチンの予防接種により免疫が獲得されれば、もはや新型コロナウイルスではなくなる日も遠くはないかもしれない。新型コロナウイルスのパンデミックは、冒頭の大政会長のお話の中でも触れられているように、本会の活動にも少なからず影響を及ぼした。来年は収束して正常な生活と社会活動に戻っていくことを祈るばかりである。このパンデミックに加え、今年は日本農学アカデミーにとって、また学界全体にとって大きな出来事があった。日本学術会議会員候補の任命拒否の問題である。本会は主な事業内容の一つに日本学術会議との連携をあげており、また、日本学術会議会員は本会正会員資格要件のうちの一つにもなっており関係が深い。会報においてこの問題に触れるべきか、特集号などを組むべきか、編集担当理事の間で議論を重ねて、本号のような構成とした。この問題への学術団体としての対応については、多くの学会においても議論があったと伺っている。学界と政治、産業、社会との関わりについて改めて考える端緒とすることができればと思う。今回の論壇には、今年度新たに農学アカデミーに入会いただいたお二人にもご執筆を依頼した。入会早々のお願いにもかかわらずご快諾いただいた。官からは藤原信好氏に、ご専門の農村工学の立場から農業インフラのライフサイクルという観点で、また、学からは水圏生産科学がご専門の酒井正博氏に農学教育について JABEE との関連から、いずれも示唆に富む論考をいただいた。また、会員からは、生産環境農学、森林圏科学、獣医学畜産学、農芸化学のそれぞれの専門領域の一人ずつに論壇へのご執筆をお願いした。年末のご多忙な時期に、また脱稿までの期間が短いにもかかわらずお引き受けいただいたことに深く感謝し、編集担当理事一同、改めて御礼を申し上げる。

(松田 幹)